

鏡の国のスパイ

灰姫

BUNZO UCHIMI
HAIRIME THROUGH LOOKING-GLASS

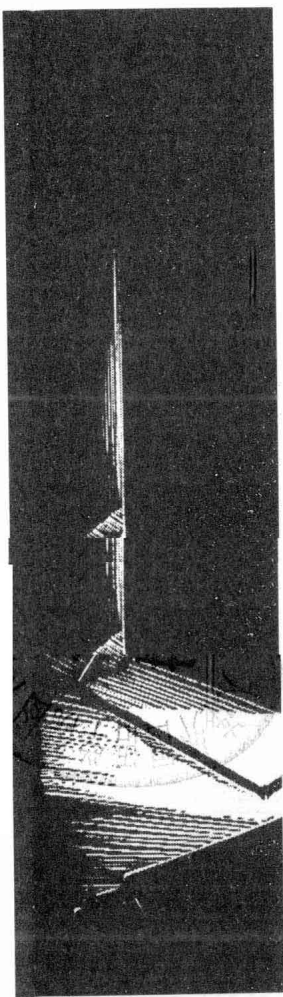
打海文三

角川書店

灰姫

鏡の国のスパイ

打海文三



BUNZO UCHIUMI
HAIHIME THROUGH LOOKING-GLASS

灰姫 鏡の国のスパイ

平成五年五月二十五日初版発行

著 者 打海文三うちかいぶんぞう

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話 営業部〇三―三八一七―八五二一

編集部〇三―三八一七―八四五―

振替 東京三―一九五二〇八 一〇二



印刷所 晩印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan ISBN4-04-872759-1 C0093

灰姫
鏡の国のスパイ

装帧
村上光延

男は冷たい石畳の上に横たわっていた。右の拳は紫色に変色して、皮を剥かれた小動物のうにぬらぬら光っていた。男はいきなり噛みついた。下顎を使って、こわばった指の一本、一本をこじ開けた。掌の中で、血溜りが干からびていた。右は、使えないことはない、と男はうそぶいた。

では脚は？ おれの脚はどうなったのだろうか？ 両肘を梃子にして、頭をもたげようとした。骨が軋んだ。肘が肩が首が悲鳴をあげた。一瞬、意識を失った。

引きずるような長い長い汽笛が男の耳に届いた。ハバロフスク発のアキアン号が構内に入ってきたのだ。

ウラジオストク。午前九時。

気に入らない、と男は呟いた。接触地点から生きて帰ってこれたことが、気に入らなかった。意識を集中させるために、自分の脚への未練を捨てた。凍傷におかされた下肢が、海馬の胴のように醜く腫れ上がっている感覚を、楽しんだ。腕に額をのせて、目を閉じた。胸の奥底で闘志がぼつと燃え上がるのを眺めた。

石畳を打つ靴音が聞こえた。どんどん速くなった。男は恐怖の発作に襲われて、手足をもが

れた昆虫のように冷たい石畳の上を這いずりはじめた。

二

北東アジア課の平木が新潟空港ロビーから緊急の電話を入れたとき、四階の調査部では東欧課の飯富をのぞく全員がゴールデンウィークの休暇のために出払っていた。

飯富が前夜から四階につめて、東欧民主化支援のファンドの実態調査を、ポーランドとハンガリーの分、二通、報告書にまとめ上げたのが午前十一時半すこし前。そこで電話が鳴った。ガラスの仕切りの向こうの盗聴防止装置付き黒電話ではなく、二十三あるデスクのいずれにもあるアイボリーホワイトの電話だった。飯富は無視することにした。報告書を課長の未決箱にほうりこんで、上着をつかむとドアに向かった。

電話は鳴りやまなかった。だだっ広い部屋を、腹をすかせた雛鳥みたいに呼び出し音がピーピーわめきたてた。飯富は、いくつかある自分の良心のひとつに舌打ちして、デスクにもどった。

電話をとった。

「赤津課長はいるか」

いきなり威圧的な声が飛びこんできた。

「どちら様ですか」

飯富はかろうじて平静を保っていた。

北東アジア課の平木だと名乗った。でぶで汗っかきの小心者だ。課長補佐のくせして課長を

呼べと命令口調でくり返した。

「誰もいない、四階は全員休暇に入った」

「なにやってんだ、あの野郎」声を荒らげた。

「緊急時の連絡は秘書課が掌握している。六階へ電話を回そうか」

飯富はなお我慢強くいった。まだ休暇をとれない奴はみんな苛^{いらだ}立^だってる。この汗っかき野郎も、このおれもだ。

「いや、いい、もう手遅れなんだ」

平木は上司の落ち度を露骨にほのめかした。

だったら勝手にしろ、飯富は腹のなかで毒づいて受話器を叩^{たた}きつけようとした。

そこで、

「待て、どういふことなんだ？」

第三の声が電話に混入した。

「連見^{けんけん}チーフの件だよ」

平木は聞かれるままにしゃべった。

「おれはちゃんと報告したんだぞ。それを、あのばか、課長だ。おれはもう知らない」

最後は悲鳴に近かった。

「なにをいってるのかわからん、落ち着け」と第三の声。

「誰だ？」飯富が割って入った。

「混線してるぞ」平木が気づいた。

「おい四階の町人」第三の声が飯富に呼びかけた。

そのひと声でわかった。郡司だ。社内でゴルフアと呼ばれている技術課の連中のチーフだ。また盗み聞きしてる。

へこの外線を技術課に回せ。あとは引き受けた」郡司がいった。

飯富はなんのためらいもなく電話を切り替えて、会社を出た。

じつをいえばその問題の日、調査部の小林正も社内にいた。小林は、平凡な、というにはなにか痛ましさを感じさせ、物静か、というにはひどく意欲が欠けている四十代半ばの大男で、六階の洲之内のオフィスでクッションの裂け目から詰め物がはみでている茶色のソファに腰かけ、広告代理店とC I（コーポレート・アイデンティティ）の打合せをしていた。

予算を非道に値切られた代理店は、そのはらいせから、担当理事の洲之内を日程をたてにゴールデンウィークの初日のこの日に無理やり出社させた。すると忿懣（ふんまん）やるかたない洲之内は、嫌がらせのためと淋（しみ）しさをまぎらわせるためと、その両方から外務省の後輩でもある小林を強引に同席させたのである。

民間の調査機関である東亜調査会はこの数年で急速に業績をのぼしていた。小林が入社したころと比べて社員数は数倍に増え、業務内容も官庁委託型から脱皮して民間の大口の顧客を獲得しつつあった。C Iなどと気取ったところで、社名とロゴマークの変更にはすぎなかったが、急成長を背景に、とくに営業サイドから、東亜調査会という黴臭（かびくさ）い社名の変更を求める強い声が出ていた。代理店が提案した新社名は、ガイアックス・リサーチ、といった。

「なあ、ガイアというのはわかるが」

洲之内が窓辺に立って魅惑的な声だが気乗りしない口調でいった。

「ガイアックスのヘックス」で、なんだ」

代理店の若僧が鼻をうごめかして説明した。

「ヘックス」というのはXです。アルファベットの最後のX、つまり〈究極〉というわけでした、ガイアックス・リサーチとは、地球をまるごとカバーする究極のリサーチという意味をこめてネーミングしました」

ふたりとも聞いていなかった。

小林はばかりでかい手に企画書をのせて、だが目の端では、洲之内がブラインドの隙間からさりげなく外をうかがっているのを、とらえていた。

洲之内は魅惑的なテノールでしゃべる、猿みたいなしわくちやの小男で、いつかクリスマス・イブの晩、誰もいなくなった社内この部屋の同じ窓辺に立って、自分の容姿に関するコンプレックスを小林にふと漏らしたことがある。そんな内気さを知る者は少ないが、小さな体に漲るみさかいのないファイティング・スピリッツには部下の誰もが辟易していた。

代理店の男は切れ目なくしゃべり続けていた。

洲之内は窓からデスクの電話に視線を泳がせ、また戻してブラインドから外を覗いた。

小林は胸の内で洲之内に囁きかけた。

へこの六階からは見えはしない、表通りからパーキングに入る濃紺のパンツが

会長の袴田が休暇を取りやめてすでに社内につめているのを、小林は知っていた。袴田は予定を変更した。カナダの別荘に出かけなかった。直ちに駆けつけることのできる場所で待機していた。では何を想定して待機していたのだ？ 投げ出していた足を引いてそろえ、考えを集中させた。それに極東委員会のメンバーが五階の電信課を支配している。支配だって！ 自分の思い浮かべた言葉に自分でびっくりした。素知らぬふりで企画書をつまみあげ、表情を隠し

た。小林の頬がほんのり赤く染まっていた。

ツキに見放された男女とはいえるもので、その日、地下社員食堂では厨房用大型換気扇の搬入があり、家族ドライブに出かけてしまった主任のかわりに急遽呼ばれた賄いのおばさん、職員呼ぶところのミセス有馬が立ち会った。取りつけが完了し、彼女がいざ帰ろうとすると、どやどやと技術課のゴルフたちが降りてきて、勝手にパーティーの準備をはじめた。

「いったい誰が後片付けするの」ミセス有馬は誰にともなくいった。もちろん聞く耳もたぬゴルフが相手だったのでミセス有馬はさっさとユニホームに着替えて厨房に入り、たばこをくわえて待った。

事業開発部・保安サービス課は、五名の技術課員からなるクルー、社内用語でいうスウィーパー班を編成して今夜のフライトで上海に飛ぶことになっていた。任務は日系企業に対する盗聴防止をふくむ機密保安サービスの提供である。そのため、技術課の大半が、機材の点検整備のために出社していた。

慣れた手つきで酒肴をならべ終わると、ゴルフたちは待った。パターの練習をしながら、ちびちび飲みながら、待った。なにを待っていたか。北東アジア課の平木である。

技術課チーフの郡司は若い衆に命じて財務課のベテラン、定年二年延長申請中の市毛を探しにいかせた。

「市毛は東亜のエンゲルス」と文書課の堀がいったことがある。

由来はこういうことだ。東亜調査会の創業者は丹野撰という今は引退した老人である。丹野の経営方針は、ひとことというなら、陰謀主義に尽きた。創業以来、市毛は東亜の財務を支えることで、丹野の陰謀に加担したというのである。マルクスの陰謀を経済的に支えたエンゲル

スといったわけだ。もちろんきょうびこんな言い草を使う者はいない。

それでも市毛には何かエンゲルスを彷彿^{ほうふ}とさせるものがあつた。社内の敵といえども彼を憎む者は少なかった。物静かな、学究肌で、それにスケベでアル中だと、ゴルフアーたちは付け加えた。

幸運にも市毛は社内^{社内}にいた。社内でパレスチナ人と呼ばれている囑託^{しゆくたつ}の臨時社員を何人かつれて、市毛は、白いホーチミン髭^{ひげ}をなでながら、いつものサンダルばきでべたべた降りてきた。油のしみた壁ひとつ向こうの文書課^{ぶんしよくわ}から、異様な熱気を感じとつて塙^{はな}ほかふたりが駆けつけた。ついでヘシंगाーと一括して呼ばれる警備課員がひとり迷い込み、大胆にも、「バーティーはいつ終わるのか」と職務上の質問を発して「無礼者！」と全員からどやされた。それ以上のお咎めはなかったので、シंगाーも、いそいそと着席するとすかさず彼にもグラスがまわされた。

午後二時二十二分。平木が到着した。平木は技術課倉庫の搬入口から密かに招き入れられ、食堂の奥にしつらえてあるバーのL字型ソファのコーナーに凱旋^{がいせん}将兵のごとく迎えられた。郡司と市毛が両側からびたりと寄り添い、聴衆がぐるりと囲み、少し離れてミセス有馬が落ちていた競馬新聞を拾って席についた。

平木は上着を脱ぎ、シャツをはだけた。汗が滝のように落ちていた。「タオル」郡司がいう間もなく、黄色いタオルが投げいれられ、平木は首筋から脇^{わき}の下までタオルで拭^{ぬぐ}った。平木はひと息つく、「蓮見が死んだ」と、最初のひとことをいった。

いきなり勢い込んだ質問が飛びかった。すると、「死んだ」は、「死んだと思う」に変わり、「いや死んだはず」にもなり、たまらず市毛が、はじめから話せ、とびしやりといった。

はじめ？ はじめてなんだ。平木はしばしビールの泡を見つめ、グラスの向こうにそもものほじまりを思い出した。

「蓮見がウラジオストク支局に顔を見せたのは、約二週間前のことだった」

「正確に、いつのことだ」郡司が尋問者気取りで口をはさんだ。

平木は手帳をひらいた。にわかに厳めしい顔つきになり、「四月十六日、火曜日」と公式発表みたいにした。はじめはやや緊張気味に、やがて奔流のごとく、聞かれたことも聞かれないうことも何でもしゃべった。

蓮見は極東委員会の現業部門の責任者だった。

五年前に発足した極東委員会は正式名称ではなく、機構上は事業開発部・二課であり、会長直属の覆面部隊であり、正規のメンバーを知る者は社内でもかぎられていた。

極東委員会が作成するレポート、通称、極東レポートは極東への投資ブームの中で、ここ数年の売れ筋商品になっていた。それを反映して、ウラジオストク支局の構成は、北東アジア課一人に対し、極東委員会四人であった。

極東という呼称にもかかわらず、情報収集の大半は欧州、とくに東欧を中心におこなわれていたから、現地班を統括しながら飛び回る蓮見がウラジオストクに姿を見せるのは、平均二ヵ月に一度といったところだった。蓮見は赴任してくると、全支局員を引率して夜の旧レーニン通りやアリウツカヤ通りにくりだし、「二重権力下におけるエイズ管理」などというスリルたっぷりの自主セミナーを主催して部下の労をねぎらった。

平木は蓮見の任務の実態については皆目見当がつかなかった、と正直にいった。

今回もいつもと変わりなかった。土曜日の夜に恒例の自主セミナーが開催され、平木はジブ

シー娘と遊んだ。じゃらじゃらいう装身具を外さないんだ、知ってるか、あの音がなんかこうかきたてるんだ、思わせぶりに付け加えた。

四月二十二日、月曜日、蓮見は支局に現れなかった。火曜日も姿を見せなかった。混血娘と小旅行でも楽しんでるのだろう、と平木は考えた。蓮見にはちょっとした仲の小娘がいたからだ。ところがその日、平木が太平洋艦隊広報センターに取材に行って、午後遅く帰ってくる、オフィスが閉まっていた。極東委員会の姿がなかった。誰ひとり。全員帰国したのだ。

平木は一晚考えぬいたすえに、東京とひそかに連絡をとり、直属の上司である赤津課長に報告した。赤津は、指示があるまで待て、といった。しかし今にいたるも何の音沙汰もない。

「赤津が次に誰に報告したか、これが問題だな」文書課の誰かがいった。

「部長に報告したんだろ?」「まさか、部長は袴田派だ、極東委員会のスパイだ」「じゃあそこでどうした赤津は?」「みんなが足を踏み鳴らして唱和した。」「弱った」「困った」「火傷しそうな情報を自分の胸にしまいこんだ」

「そんな可憐なたまじやない。やっぱり誰かにしゃべったのさ。間違ひなく報告は上にあがった、あの系統をたどって」パレスチナ人のひとりが断言した。

「あの系統ってなんだ、はつきりものをいえ」郡司が怒鳴った。

「反袴田ラインだよ」「反主流派のトップは洲之内だ。明かせない秘密はぜんぶあっちへ流れるんだ」みんなが声をそろえていった。

「そして昨日の朝のことだ」

平木が話をひきもどした。

「出勤すると支局の前の石畳を蓮見が這ったよ。イモムシみたいに、寒さに凍えて。素足だ

った。はじめは靴をはいてると思った。靴じゃなかった。血まみれの足が凍傷で赤黒く腫れ上がってた。おれは蓮見をオフィスに担ぎ込んで応急手当をした。顔と手は、まあ、きれいだった。それ以外はじゅくじゅくだったよ。足指はていねいに砕いてあった。ぜんぶだ」

市毛が平木から視線をそらした。

郡司はグラスをそつとテーブルにおいた。

平木は話をつづけた。その時点で蓮見の意識はまだしっかりしていた。しかしなにも話さず、医師の治療を拒否し、東京と連絡をとることさえ許さず、直ちに帰国の手配をするよう命じた。あいてる便などなかった。ハバロフスクの日本領事館に急病人が出たとかけあって、なんとか翌朝の臨時便に席をふたつ確保した。容態は悪化していた。車椅子を調達して蓮見を乗せ、平木が付き添った。機内で蓮見は眠っていた。生死の境をさ迷っていたというほうが正確だった。蓮見はもう死ぬ、と平木は思った。

「誰にも知らせていなかった」

平木が念を押した。

「蓮見が生きて帰ったことも、その便に乗ることも、誰も知らないはずだった」

ところが新潟空港の税関を出たところで秘書課長の沢地が待っていた。知らない顔の従者がふたりいて、そいつらが蓮見と荷物を奪って表に用意していた白いバンに押し込んだ。沢地は「すべて忘れろ」といい捨てて、去った。

「そこでおまえはおれに報告した」郡司が引き取っていった。

「なにがあったんだ。誰が蓮見をあんな目にあわせたんだ」

平木は呟いて、ぶるっと身震いした。すっかり汗がひいていた。シャツのボタンを上までき

ちっと留めた。ネクタイを締めなおすカサカサという音が聞こえた。

聴衆の後ろのほうで、

「KGBの残党かな」警備課員が間のびした口調でいった。

「マフィアのほうが強い」技術課の若い衆が断じた。

「ばか」全員がいった。

どっと湧いた嘲笑の渦を、塙が手をふってかき消していった。

「これは妬みの犯行だ」

「妬み？」

「世紀末最大のヒット商品、われらが極東レポートへの妬みだよ」

「じゃ誰が」

「CIA」郡司がすかさずいった。「いよいよ決戦の時迫るだ」

「決戦？」

「日米決戦だよ」

技術課オハコのCIA謀略説がはじまった。

「CIAはNSA（国家安全保障局）に突出されて今や凋落の一端。予算削減人員削減。宿敵ソ連は自然消滅。じゃあ、どうやって、CIAは自己の主体性の危機を免れうるか。あらたなる敵の創出だよ。つまりわれわれに対する挑発。手始めに連見部隊の掃討が行なわれた。主戦場はむろん環日本海経済圏」

そこで郡司は拍手を強要してミエをきった。

「思いおこせよ、勝者が敗者を裁いたあの東京裁判」

この手の話には聴衆全員うんざりしていた。しかし誰もが郡司の陰気な肉体が怖くて、マイクを奪えなかった。

たちまち座はシラけた。その原因は、いつものようにアルコール量の不足に転嫁された。若い衆が酒を求めて街へ走った。空き瓶を整理し、汚れた皿を積み上げてそっくりミセス有馬に渡した。

新しい酒が全員に注がれたところで、市毛が静かに切り出した。

「事態はさほど単純というわけではない。諸君は極東委員会のフィクサーが丹野撰であることを忘れていないか？」

丹野は一切の役職から退いているとはいえ、今なお隠然たる影響力を保持していた。

「丹野は情勢をどう読んでいるか」市毛は聴衆に問いかけ、自ら答えた。「極東共和国の復活だよ」

市毛によれば、極東共和国とはたった二年で消滅した幻の共和国である。時は一九二〇年代初頭、丹野がまだ旧制高校の寮生で、新入生歓迎集会で芸者と白黒ショウを実演してみせたり、大陸派の秘密結社に出入りしていたころの話だった。極東ロシアでは、帝政派がまだ存命で、加えてコザック軍閥と革命軍という権力の三重状況。そこへチェコ軍救援の名目で日米欧がシベリアへ出兵した。弱り果てたレーニンが列強との正面对決を避けるためにもうけた緩衝国家が、この幻の極東共和国だった。

「いいかね、かの地は今やロシア共和国の領土ということになっておる」

市毛は教鞭きょうべんみたいに割り箸はしをふりふり話をつづけた。

「ロシアは旧ソ連邦をひとまわり小さくしただけで、広大な版図を持つ帝国であることに変わ